優秀賞

良質な水のために

川崎市立西生田中学校
三年　加藤　孝祐

「トイレから蛇口へ」

その記事のタイトルを見たときは驚いた。米国のカリフォルニア州では長期にわたる干ばつで水が不足している。そこで既に使われたトイレの水などの廃水を、様々な段階を経て消毒し、飲料水として再生利用することを発表したそうだ。調べてみると、カリフォルニア州だけでなく水資源が少ない多くの地域や国が、廃水を飲料水に再生する取り組みを始めているらしい。

この現実を知って僕は衝撃を受けた。浄化したとはいえ、トイレに使った水を飲むのは抵抗がある。ロサンゼルスに住む僕の尊敬する大谷選手も、その再生水を飲むのだろうか。いつか日本もそうなっていくのだろうか。水不足はそれほど深刻なのか。僕は自分が住む神奈川県の水事情について調べてみた。

神奈川県には相模川水系と酒匂川水系に設けられた四つのダムがあり、県民が必要とする水の「量」の心配はほぼ無いらしい。しかし、水の「質」という点で大きく二つの問題がある。ダム湖周辺地域では生活排水対策が不十分で、ダム湖の窒素やリンの濃度が上がり水質が悪化していること、また雨水を蓄える水源地域の森林整備が遅れ、雨水をゆっくり流す森林の機能が低下していることだ。

そこで神奈川県は、県民への良質な水の安定的確保のために「かながわ水源環境保全・再生施策大綱」をまとめ、平成十九年から二十年間、四期にわたりこれらの問題に取り組んでいる。第一期から第三期では、水源地域周辺の森林の整備が進み、下草の成長が見られるなど森林の機能が向上してきた。また、ダム湖上流地域での生活排水の処理率も向上し、水質が徐々に回復している。しかし、ダム湖のリン濃度は依然として高く、また台風などの自然災害を見据えた森林の土壌保全も必要である。令和四年から始まった第四期ではそのような課題に取り組み、「良質な水の確保」に力を注いでいるらしい。

神奈川県が県民のために必要な水の「量」を確保するだけでなく、その「質」を考え、より良質な水を県民に供給する努力をしていることを初めて知り、きれいな水を守るために自分にもできることはないか、と僕は考えた。水道水は主に河川の水が使われているので、良質な水を確保するには川の水質を保つことが大切だ。そのためには生活排水を見直すことが鍵となる。生活排水は恒常的に排出されるため、河川の水質への影響が大きくなるからだ。特に台所から出る排水は河川を汚す原因となり、コップ一杯の牛乳を流しただけで、魚が棲める水に薄めるのに浴槽十四杯分の水が必要になるという。しかし台所からの汚染は一人一人の工夫で減らすことができる。例えば、食器に残った油は紙で拭いてから洗うようにしたり、調理くずはネットなどを使って極力流さない。また、米のとぎ汁は植木の水やりに使う。国や県だけに対策を委ねるのではなく、個人が水の問題を自分ごととして考え、小さな手間を惜しまないことが河川の水質改善につながる。僕は今まで何も考えずに台所に油を流していたが、これからは水が汚れないような行動を心がけたい。そして、神奈川県の水源環境保全活動や、自分達でできる様々な対策を、僕も周りの人達に伝えて協力者を増やしていきたい。それが神奈川県だけでなく、日本、世界の水質改善につながるはずだから。

今は神奈川県の水量は十分かもしれないが、地球温暖化などの環境の変化で水量が不足する日が来るかもしれない。そんな時のためにも僕は水を大切に使いたい。トイレの水の再生水よりも、おいしい神奈川県の水をこれからもずっと飲んでいたいから。